

# 知的障害教育における「考える力」を大切にした教育実践（1）

—高等部で考える生徒の「考える力」とは—

藤澤真木子・岡澤 慎一・齋藤 大地

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日



# 知的障害教育における「考える力」を大切にされた教育実践(1)<sup>†</sup> —高等部で考える生徒の「考える力」とは—

藤澤真木子\*・岡澤 慎一\*\*・齋藤 大地\*\*\*  
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校\*  
宇都宮大学大学院教育学研究科\*\*  
宇都宮大学共同教育学部\*\*\*

本研究では、知的障害特別支援学校における「考える力」について、高等部での授業実践から見えてきた生徒の「考える姿」を整理していくことを通じて検討した。高等部の生徒が授業において見せるエピソードを複数の教師で見取り、学部内研究会で意見交換しながら、生徒の多様な「考える姿」を確認した。その結果、生徒は経験したことを基にして答えたり、行動したりする様子や教師や友達とのやりとりの中で、自分の考えや行動を変化させていく様子が「考える姿」として見いだされることが分かった。以上より、高等部における生徒の「考える力」とは、「状況の変化や周囲の状況に応じて、経験に基づいて想起、連想したり、予測や判断したりしながら、自分の行動をより良く切り換えていこうとする力」とであると定義した。

キーワード：考える力、考える姿、知的障害特別支援学校高等部

## I はじめに

本校高等部の生徒は、知的障害の他に、自閉スペクトラム症、ダウン症候群、ウィリアムズ症候群や精神運動発達遅滞などの障害を併せ有する生徒が在籍している。これまでの学校生活における生徒の「考える姿」の様子は、目の前の状況に対して、過去に経験したことを基に行動する生徒もいれば、教師からの言葉掛けをきっかけとして、自分がどうした

いかに考えたり、選択したりして行動している生徒もいる。また、考えたことをすぐに表現できる生徒や考えている様子は見られるものの表現することが難しい生徒もいるなど、行為のあり様や速度、考え方などに様々な違いが見出される。このように、生徒によって「考える姿」とは多様であり、日常生活や学校生活において、随所にかつ頻繁に見られるものである。

現代社会では、AI等の発展により、多くの知識を蓄えていることの価値が下がっており、人間に必要なことは、「自分の頭で考えること」であることが言われている(細谷, 2017)。そのため、今後、生徒に求められる力として、自分で「考える力」が挙げられる。教師は、生徒の「考える力」を学校生活のなかでどのように育ていけるのか、高等部の特徴や生徒の特性に応じた「考える力」とは何か、さらには効果的な日々の授業実践とは何かについて検討していくことが重要であろう。また、生徒の考える姿は、「考える力」によって発揮されるものであり、「考える力」と「考える姿」は相互に関連しているものとする。そのため、本校における研究の初年度として、生徒の「考える姿」から、高等部における「考える力」とは何かを整理し、教師間で

<sup>†</sup> Makiko FUJISAWA\* and Shinichi OKAZAWA\*\* and Daichi SAITO\*\*\*: Educational Practices that Value the Ability to Think in Education for Intellectual Disabilities (1): What is the “thinking ability” for high school

Keywords: ability to think, How Children “think” Intellectually Disabled Special Needs School High School

\* Special Needs Education School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Graduate School of Education, Utsunomiya University

\*\*\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: okazawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(連絡先: daichis@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

共通理解をもって授業実践を行っていくことが必要であると考え。

## II 目的

知的障害特別支援学校高等部における「考える力」とは何かについて、授業の中における生徒一人一人の「考える姿」について整理していくことを通して検討する。

## III 方法

### 1 高等部における生徒の「考える力」の仮説

研究協力者の指導・助言を基に、教師間で意見交換し、学部内で検討を重ね、生徒の「考える力」について仮説を立てた。

### 2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

高等部で立てた仮説を基に、生徒の「考える力」に焦点を当てた授業の学習指導案作成と授業づくりを行った。授業実践では、学部教師一人一授業の取り組みとして、6月～10月の間に研究授業を行った。

### 3 生徒の「考える姿」のエピソード記述と学部内研究会の実施

授業実践において見られた生徒の「考える姿」についてエピソードを記述し、教師間で意見交換を行った。意見交換は、Google社が提供するオンラインホワイトボードサービスであるGoogle Jamboard（以下、ジャムボード）を使用して行った。研究協力者からの指導・助言を参考に、授業のどの場面で生徒の「考える姿」が見られたかについての記述と、記入者からエピソード記述の詳細についての説明を求めた。また、出された様々な意見を場面や生徒の姿ごとに分類し、キーワードを挙げながらカテゴリ化して整理した。なお、意見を整理していく過程は、全てジャムボードを使用し、オンラインでパソコンの画面上で行った。

### 4 高等部における生徒の「考える力」の再検討

学部内研究会で出された「考える姿」やキーワードを基に、高等部で考える生徒の「考える力」について再検討を行った。

## IV 結果と考察

### 1 高等部における生徒の「考える力」の仮説と再検討

高等部の生徒は、産業現場等における実習や就労体験学習など、校外に出る機会が多く、周囲の状況が変わる機会も多い。そのようななかで生徒は、今

表1 高等部で考える生徒の「考える力」の仮説と定義

検討した時期	「考える力」とは
6月 (研究協力者の指導・助言後)	・状況の変化や周囲の状況に応じて、自分の行動をより適切な行動に切り換えていくために必要な力。
9月 (授業実践と部内研究会後)	・状況の変化や周囲の状況に応じて、経験に基づいて想起、連想したり、予測や判断したりしながら、自分の行動をより適切な行動に切り換えていこうとする力。
12月 (授業実践と公開研究会実施後)	・状況の変化や周囲の状況に応じて、経験に基づいて想起、連想したり、予測や判断したりしながら、自分の行動をより良く切り換えていこうとする力。

後様々な状況に応じて行動することが求められると考える。6月に行った研究協力者との協議では、考えるという経験を重ねることで、いろいろな状況に応じて、どう対応したらよいかを判断したり、いろいろな方面から考えを広げて、自ら行動を切り換えたりすることができるようになることが大切であるとの意見が挙げられた。それらのことから、現在の高等部の生徒にとって必要な「考える力」を、表1に示したように仮定した。また、考える姿を見取るためには、考えたくなる問い、考えやすい状況づくり、一人一人が考えやすくなるような支援が必要であり、考え方にも個性があることを踏まえ、十分に考える時間を取ったり、考えたことを表現できる方法を保障したりすることも大切ではないかという意見が挙げられた。それらの意見を基に、学部内の教師で検討を行った。その後、6、7月に実施した研究授業において見られた生徒の「考える姿」から、どのような場面で生徒が考えていたかという点について整理し、そこで多くの意見が挙げられていた、「経験」、「想起」、「連想」、「予測」、「判断」といったキーワードを「考える力」の定義に入れることとした。また、9月の学部内研究会では、授業での様子から「意欲」が全ての原動力につながるという意見があり、それらのことから、生徒が自らの行動を「切り換えていこうとする」ことが「考える力」であると仮定の見直しを行った。さらに10月、11月に実施した研究授業では、周囲の状況を見ながら、経験のない活動に対して、生徒が自分の考えを変えながら活動に取り組む様子が見られた。「考える力」の定義を「適切な行動に切り換える」とした場合、教師と生徒が共通に認める「行動の正解」があり、そこに向かっていく必要がある。しかし、正解が分からない中、試行錯誤をしながら取り組む姿の中に

も「考える姿」があるとすれば、生徒が主体的に、自分が良いと思う方向へ行動を切り換える場面を設定していけると良いとの意見が挙げられた。そこで、生徒自身が「より良い行動に切り換える」ことが「考える力」であると再度見直し、定義した。

## 2 「考える力」に焦点を当てた授業づくりと授業実践

2022（令和4）年度は、教師一人一授業実践として、公開研究会の授業担当者は10月、11月に研究授業を行い、その他の教師は6、7月の期間に研究授業を行った。

表2には、高等部の教師一人一授業実践における授業の概要について示した。高等部では、保健体育で1授業、職業で1授業、総合的な探究の時間で1授業、生活単元学習で2授業、作業学習で1授業の計6授業を行った。授業づくりでは、仮説として立てた「考える力」に焦点を当てて、生徒の「考える姿」が多く見られるような授業内容の検討を行った。また、場の設定や教材・教具の工夫、授業の目標設定と指導上の留意点等の検討を行いながら、学習指導案を立案して実践を行った。図1には、学習指導案の一部を示した。

表2 高等部の一人一授業実践における授業の概要

教科・指導の形態名	単元・題材名
保健体育	病気やけがの防止と健康
職業	校内実習事後学習
作業学習	清掃活動 安全な清掃
生活単元学習	校外宿泊学習
総合的な探究の時間	文化の違いに触れよう
生活単元学習	宝木に‘あい’を

Figure 1 shows a detailed lesson plan for the unit '宝木に‘あい’を'. The plan is structured as follows:

- 授業のねらい・特色・目標:** Focuses on understanding the concept of 'あい' (love) through practical activities like dyeing and fabric work.
- 授業の進行:** A 7-step process: 1. 藍染めしよう, 2. 藍染めて何だろう, 3. 藍染めをしよう, 4. 染めをしよう, 5. 藍染めをしよう, 6. 染めをしよう, 7. 世界にだけだけの情.
- 評価の観点:** Includes '学習態度' (Learning Attitude) and '学習成果' (Learning Outcomes).
- 授業の目標:** Aims to develop '考える力' (Thinking Power) through hands-on learning.
- 学習活動:** Includes '自由な発想を容れる空間をつくる' (Creating a space for free thinking) and 'デザインは自由であることを知る' (Knowing that design is free).
- 授業の振り返り:** Reflects on the learning process and the concept of 'あい'.

図1 学習指導案の一部

## 3 生徒の「考える姿」のエピソード記述と学部内研究会の実施

学部内研究会では、ジャムボードを使用して教師間で意見交換を行った。授業のどのような場面で生徒が考えていたか、また、どのような関わりの中で考えていたか、さらには、その時々を生徒の発言など、教師が見取った様々な場面を入力し、それらをカテゴリ化して整理した。これらの「考える姿」の見取りから、生徒は経験したことを基にして答えたり、行動したりする様子や、教師や友達とのやりとりの中で、自分の考えや行動を変化させていく様子が見られることが分かった。図2には、ジャムボードにおける意見交換の一部を示した。

保健体育「病気とけがの予防と健康」では、様々な物の中から熱中症を予防するために使う物を選ぶ学習を行い、日頃の経験から、自分が知っている物や使っている物を選ぶ姿やその使い方を考えて発表する姿などが見られた。

職業「校内実習事後学習」では、実習中の動画を見て振り返りをしながら、自分の取り組みを振り返ったり、友達の様子を見てよかったところを伝えあったりする中で、今後やってみたいことを考える姿などが見られた。

作業学習「清掃活動」では、安全な清掃方法について考える学習の中で、写真を見てストーリーを予測し、次にどうなるかを考えたり、写真を見比べて危ない箇所を考えたりする姿などが見られた。

生活単元学習「校外宿泊学習」では、教師の発問に対して自分が知っていることを連想して考える姿や友達と役割分担を決める活動で、相手とのやりとりの中で「考える姿」が見られた。

総合的な探究の時間「文化の違いに触れよう」では、様々な道具を使って名画の再現をする学習の中で、何を使ったら良いか考える姿や様々な道具をどのように使ったらより名画に近くなるかを試行錯誤する姿などが見られた。

生活単元学習「宝木に‘あい’を」では、本大学共同教育学部教授佐々木和也先生、助教カバリエロ優子先生の指導の下、藍の栽培、染色、調理、制作活動など、藍染めを軸とした多岐にわたる学習を行ってきた。対象とした授業では、藍染めでオリジナルの手ぬぐいを作る中で、見本や友達の描いた図案と比較をしたり、教師とやりとりしたりする中で「考える姿」が見られた。



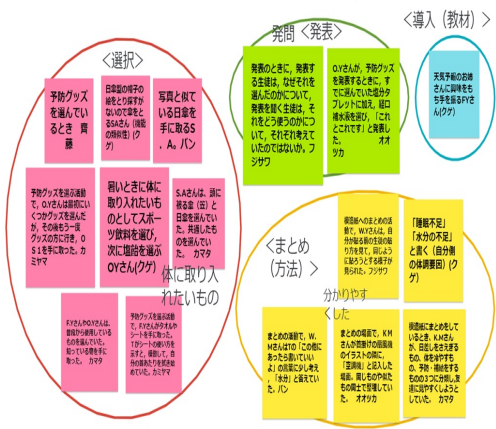


図2 「病気やけがの防止と健康」における「考える姿」



図3 「校外宿泊学習」における「考える姿」

授業の中で見られた様々な場面から、生徒の考える姿が見られた要因を次のように考えた。生徒は、初めて取り組む活動においても、これまでの生活経験や学習したことを、場面ごとに応用したり、転用したりして活動に合った行動に切り換える姿が見られた。これは、生徒にとって、「知っている」「分かる」という要素が少しでもあることが必要であり、課題に適度にその要素を入れることが、考える姿を引き出すにあたって、効果を発揮すると考えられた。教師が場面の設定の仕方やどのように教材・教具の準備をするかということも重要となる。また、生徒同士であったり、教師が仲介したりする関わりの中において、生徒が行動を調整したり、協働したりしながら考える姿が見られた。これは、教師が友達の話の聞いたり、周囲の様子を見たりする中で、自分自身はどうすることが良いか、どうしたいかを生徒が考えて発言したり、行動したりする様子から分かったことであった。

V まとめと今後の課題

高等部では、授業実践を通じて、授業中に見られた生徒の「考える姿」について検討を重ねてきた。そして、その具体的な「考える姿」から、高等部で考える生徒の「考える力」について、表1のように整理することができた。想起や連想、予測や判断などの内的活動は、状況に対する行動が発現した際に生じているものと推測され、生徒および教師自身のこうした活動を仮定して対応することが、生徒が状況を理解し、判断して行動を切り換える力につながるものと考えている。

今後の課題としては、今年度の実践から見えてきた、新たな「考える姿」からの「考える力」の定義の検証と、定義した「考える力」を育成するための授業づくりの二点が挙げられる。授業の中では、一人で考える場面だけではなく他者と一緒に考える場面や相手のことを考える場面もあり、そこから新たな「考える姿」が見えてきた。また、「考える姿」は、経験に基づくことだけではなく、想像するという行為の中においても見いだされることも授業を通して見えてきたことである。これらのことから、今年度の実践を基盤としながら、新たに見えてきた「考える姿」が、どのように「考える力」につながっていくのか検証し、「考える力」を育成する授業づくりの検討を進めていきたいと考える。

謝辞

本研究を行うにあたり、御指導、御協力を頂いた、本大学共同教育学部教授佐々木和也先生、助教カバリエロ優子先生に心から感謝すると共に厚く御礼申し上げます。

付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校における令和四年度校内研究の高等部研究（メンバー：大塚政紀、鎌田麻恵、神山陽啓、久家康雄、斎藤祥平、伴伶子、福田陽一郎、藤澤真木子、岡澤慎一※、齋藤大地※）として共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。（氏名の並び順は五十音順、※は研究協力者）

文献

細谷功 (2017) 『考える練習帳』, ダイヤモンド社.

2023年3月31日 受理



Educational Practices that Value the Ability to Think  
in Education for Intellectual Disabilities (1) :  
What is the “thinking ability” for high school

Makiko FUJISAWA and Shinichi OKAZAWA and Daichi SAITO